２０２３年「ツバメの集団塒（ねぐら）入り観察会」
＆　塒にまつわるエピソード

報告／酒井　和子

■観察会

〇日　時／２０２３年７月２９日（土）１８：５０～１９：３５　日没１９：０３

〇天　気／晴れ

〇場　所／堺市美原区「今池」

〇参加者／野口隆司、米道綱夫、山本浩平、垣井清澄、酒井和子

写真①　夕日をバックに飛翔するツバメ

思い思いに飛翔！

〇調　査／

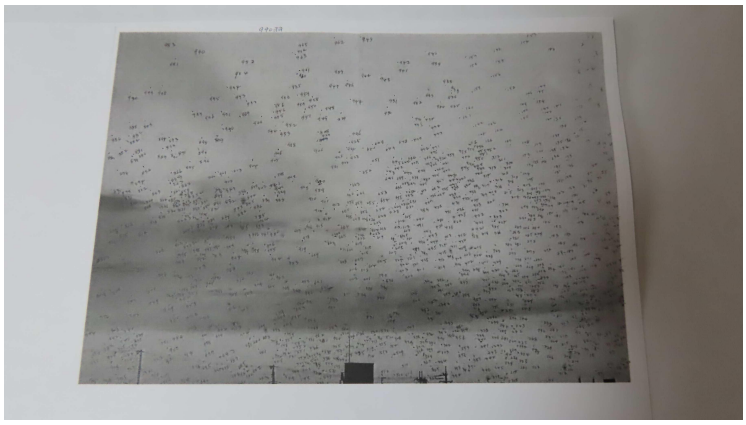
今夏も野口さんの案内で、１昨年、昨年に続いて「今池」でツバメの集団塒入りを観察することになった。今池は、地図で見るとソックス形のため池になっているが、周囲が住宅や町工場、荒地に囲まれ、観察したのはそのソックスのつま先のほんのわずかな空地からである。その観察地から見ると、植生はガマが優占しているようだが、ヨシが前年よりも繁茂し、塒としての環境はアップしているように見えた。

到着時、日没を前に西の空は茜色に染まっていて、早や、数羽ずつツバメがヨシ原を目がけて戻ってきつつあった。ツバメたちは決まって同じ方向からヨシ原に戻ってくる。南大阪一円から集まってくると思われるので四方からヨシ原を目指してもよさそうなものだが、一定のルート、そう、夕日を目指して、どのグループも決まったルードで戻ってくる。みるみる数が増してくる。注意して見てみると殆ど、燕尾が短い。今年巣立った若ツバメたちのようだ。集団でヨシ原で身を寄せ合って一夜を過ごすのはタカ類や野ネコなどから身を守るためだとされているが、塒入り時のあのおしゃべりから察すると、大切な情報交換の場にもなっているようだ。それと後１か月余りで連れだってフィリピンなど東南アジアに渡っていくための飛行訓練の場にもなっているのではないだろうか。

日没。美しい残照をバックに上空では「ツバメ・ショウ」が始まる。右に旋回、左に大きく旋回。高く高く点々にしか見えないほど高く...、かと思えば頭上すれすれにすり抜けていき、自由自在に飛び回っている。そのスピード感に圧倒され、シャッターが追い付かない。

向かい側のヨシ原では、はや場所取り合戦が始まっている。クローズアップしてみると１本のヨシに１羽、いや２羽。一旦収まったように見えてもふいに飛び立って再度旋回。また寝場所を探しが始まる。賑やかなおしゃべりが一時続く。あっ、アブラコウモリが飛び始めた。

塒入りの終了時刻。門限に遅れたツバメが大急ぎで戻ってくる。遅刻組は”木の葉落し”にヨシ原に突進する。まだ７月末のことでもあり、本日の「ツバメ・ショウ」は１９：３０にあっさりと幕を閉じた。本日の塒入りの総数は、**５０００羽＋**。さてツバメの数はどうやって数えるの？私のやり方はこうだ。１コマを拡大コピーして、小さな点々にナンバーを振っていく。上記①の写真では**９６０**を数えた。ここから全体数を推測していく。



写真①のカウント数

■塒にまつわるエピソード

・そもそもは...

今を遡ること３０年前、私が娘の案内で宇治川・観月橋先の河川敷で１万羽を超えるツバメの集団塒を見たことに始まる。当時はまだツバメが集団塒を作ることも、夏の風物詩として奈良･平城宮跡や淀川・鵜殿の塒などが鑑賞されることもない時代で、日没時にどこからともなく刻々と集まってくるツバメの群れをただただあっけを取られて眺めたものである。あまりにワクワクさせられたので、次年度は堺自然観察会など各観察会グループに呼びかけて、電車を乗り継いで観月橋まで行き、土手沿いにスタンバイしてこの「ツバメ・ショウ」をみんなで鑑賞した。

それがどんな風に「観察会」に引き継がれていったのか本当に不思議な気がするのだが、観月橋の観察会に参加された岸田さんからビッグニュースが飛び込んできた。知り合いの方から大津池で夕刻時に大量のツバメが集まってくると聞き込み、ピンときたに違いない。早速、探索。そしてこの時、堺では初めて、大津池にツバメの塒が出来ていることが確認されたのである。１９９４年の夏だった。

・大津池の塒――「ツバメ・ショウ」に子どもたちを招待

大津池の広々とした水面と上空の美しい夕焼けのもと、３０００羽、５０００羽のツバメたちが飛翔する光景は何とも勇壮だった。こんなに身近で３００

０、時には１００００を超える生き物が見られる機会などほぼ皆無である。その壮大さに圧倒される。大津池は土手から安全に鑑賞できる。初芝駅からのアクセズもよい。近くの体育館に駐車場もある。誘い合わせて度々観察会を実施した。
１９９６年の夏休み前のこと。小学校の学校給食で「Ｏ－１５７」による食中毒が発生し、子どもたちは夏休み、自粛を余儀なくされた。自粛の解除後、子どもたちに元気を出して貰おうと「ツバメの塒入りを見ませんか」と大津池に招待した。「ツバメ・ショウ」に気持ちが晴れ晴れしたのではないだろうか。ある３歳児は「チュバメ！チュバメ！」と興奮して夜、寝つけなかったという。よほどのインパクトだったのだろう。余談だが、その後、大平寺や元禄池などでもファミリー観察会を催し、多くの子どもに参加してもらった。自由研究のテーマになり、秋の理科展に出展していた。

・引っ越しに次ぐ、引っ越し

　ツバメの塒入り観察会は、度重なる塒の引っ越しに悩まされてきた。昨年まで使っていたヨシ原に今年は来ないとか、ある日突然、塒か空っぽになっているとか――地図でヨシ原のありそうなため池をマークして探しまわったり、日暮時に数羽のツバメの飛んで行く先の”追っかけ”をしたり...。それでもツバメのようには俯瞰が出来ないので塒探しは難航した。
私が１９９５年に大平寺の塒を発見した時はこうだった。夕暮れ時に”追っかけ”をしてツバメの旋回に目をつけ、翌日場所を確認。塒は水田の脇の小さなヨシ原だった。ここでは３０００羽から時には１００００万羽を数えるまで膨らんだこともあった。しかし、案の定、２年ほどで引っ越してしまった。

・主な塒の引っ越し先

＊数字は発見年度、塒は年によりダブったり、前の塒が戻ったり。空白の年もあった。
野尻町・大津池（９４）→新家町・星谷池（９５）→引野町・小池（９９）→大平寺・水田（９５）→山田・元禄池（９６）→信太・合池（０４）→山田・元禄池（０６）→松原市・寺池（１０）→平井・放置田（１３）→美原区・舟渡池（１５）→美原区・新池（１６）→美原区・上青井池（１８）→美原区・中の池（２１）→美原区・今池（２１）

・なぜ引っ越すのか？ミステリーだが、引っ越しの誘因は...

〇ヨシ原が塒としてオーバーユースになる
〇植生の変化　ヨシがガマ優占のため池になる
〇ため池の劣化や陸地化　セイタカアワダチソウが優占
〇ため池の改変　グランドや公園、商業施設などに
〇周辺での花火大会や夜間照明などの脅威
〇不明　宇治川の河川敷でも塒が少しずつ移動

・バンディング（野鳥の標識調査）

大津池や大平寺、今池、元禄池では、バンダー（資格取得者）にお願いして度々バンディッグ（標識調査）を実施した。標識調査の旗を設置してヨシ原の縁にかすみ網を張り、日没後、網にかかったツバメを捕獲。丁寧に網からはずして１羽ずつ体重、ウイング（翼の長さ）とスロット（喉の色）を計測し、足環（記号・ナンバー付）をはめて放鳥する。お腹の羽毛が抜けているのは抱卵した♀。燕尾（ウイング）が長いのは成鳥。スロットの色が淡いのは巣立ちすぐの個体...。たまにリカバー（再捕獲）がいる。河内長野や大阪市内で雛の時にバンディングされた個体である。多い時には数百羽も網に掛り、夜中まで作業が続いたこともあった。

バンディングで判明したことは、成鳥の♂は７月末には渡りはじめ、♀はお盆位までとどまっていること。一般にツバメは秋に渡るとされているが、実際にはお盆を過ぎると順次南への渡りを始め、９月には塒の数は１／３程度になり、１０月には塒は見られなくなる。

バンディングは、ツバメに限らず渡りのルートの解明に役立つが、滅多にないことだが足環の付いた個体がフィリピンで落鳥してナンバーを辿って誰がいつどこでバンディングしたかが判明した例もある。

・ツバメの受難が続いている

春、３月中旬には泉北ＮＴのため池に先発隊が南から渡ってくる。しばらく春塒などに滞在すると言われているが（春塒は元禄池や黒風呂池で見られたことがある)、その後、泉ヶ丘界隈ではバス停辺りで営巣を始める。受難はその巣がカラスやイソヒヨドリに狙われることである。カラスの子育てとバッティングするのか、２０２３年はことごとくやられ、４月最初の営巣による１番子は見られなかった。２番子は何とか巣立ちが出来た個体のもいたが、例年は少ない３番子が珍しく多かった。営巣・抱卵まで無事にすすみ、猛暑の７月末にはタクシー乗り場前や銀行前で４羽、５羽の嘴の黄色い雛が元気に巣立ちを迎える姿が多くの人の目を引いた。

バス停前の放棄された巣（４／２３）

巣立ち前の３番子（７／３０）

かつて農家の軒先などに営巣していたツバメたちは、現在はコンクリート建築の壁面に巣作りをしてカラスとの攻防を繰り返している。ツバメの生活圏と営巣形態などがここ数１０年で変化してきているようにみえる。減少している

と言われているツバメたち。繁殖を応援していきたいのと、ため池のヨシ原の保全を行政ほかにお願いしていきたいと思っている。

◇　　◇

ところで、塒の朝立ちも、ぜひ、見て貰いたい。日の出前に塒近くにスタンバイしていると、４０羽、５０羽と小グループがまるで煙のようにすうっと飛び立っていく。辺りが明るくなって気が付くと、ツバメたちはみんな出掛けてしまっている。今日はどこまでいくのやら...。